

「アブラハム、独り子イサクを献げる」

2021年02月08日

神が示された場所に着くと、アブラハムはそこに祭壇を築き、薪を並べ、息子イサクを縛って祭壇の薪の上に載せた。アブラハムは手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとした。すると、天から主の使いが呼びかけ、「アブラハム、アブラハム」と言った。彼が、「はい、ここにおります」と答えると、主の使いは言った。「その子に手を下してはならない。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが今、分かった。あなたは自分の息子、自分の独り子を私のために惜しまなかった。」アブラハムが目を上げて見ると、ちょうど一匹の雄羊がやぶに角を取られていた。アブラハムは行ってその雄羊を捕らえ、それを息子の代わりに焼き尽くすいけにえとして献げた。アブラハムはその場所をヤハウェ・イルエと名付けた。それは今日、「主の山に備えあり」と言われている。(創世記 22 章 9 節～14 節)

アブラハム物語において、独り子イサクを献げる出来事は彼の信仰のクライマックスである。理解し難いことは多々あるが、聖書が伝える出来事を、そのまま受け止めれば、以下のようになる。アブラハムとサラの間に、神の約束通り、イサクが与えられた。夫婦は深い愛情をもって育て、イサクは親の愛情を受け、純真で健やかに育ったに違いない。落ち着いた生活が続くなか、神はアブラハムを試み、呼びかけられた。「アブラハムよ、あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そして私が示す一つの山で、彼を焼き尽くすいけにえとして献げなさい」と言われた。「焼き尽くすいけにえとして献げ」るとは、薪を積み、その上に屠った羊などのいけにえを置き、火で焼いて、香りを神に献げる礼拝である。神は羊などの家畜ではなく、独り子イサクをいけにえとして献げよと命じられた。あり得ない命令である。神は、アブラハムの子どもから子孫が増え、その子孫に祝福を与えると約束されたのであるから、イサクをいけにえに献げれば、子孫に繋がらず、途絶えてしまう。神の言葉は矛盾する。ところがアブラハムは、矛盾する神の命令に従った。二人の従者とイサクを連れ、いけにえを焼き尽くすために用いる薪を携え、神が示した場所へと出かけた。三日目に、アブラハムが見上げると、遠くにその場所が見えた。アブラハムは従者に「ろばと一緒にここにいなさい。私と子どもはあそこまで行き、礼拝をしてまた戻って来る」と言い、いけにえを焼き尽くすために用いる薪をイサクに背負わせ、自分は火と刃物を持って、二人は一緒に行った。イサクはアブラハムに「お父さん」と呼びかけ、「火と薪はありますが、焼き尽くすいけにえにする小羊はどこですか」と聞いた。イサクは、父がしばしば羊をいけにえに献げる礼拝を見ていたので、礼拝に行くことは理解できたが、いけにえに献げる小羊がないことを疑問に思ったのである。アブラハムは「息子よ、焼き尽くすいけにえの小羊は神ご自身が備えてくださる」と答えている。お前をいけにえとして献げるとは言えない。

神が示された場所に着くと、アブラハムは祭壇を築き、薪を並べた。そして息子イサクを縛って祭壇の薪の上に載せた。アブラハムは手を伸ばして刃物を取り、イサクを屠ろうとした。アブラハムは、苦悩の叫びを上げることなく、神の命令に淡々と従っている。

するとその時、天から主の使いが、「アブラハムよ」と呼びかけ、「その子に手を下してはならない。あなたが神を畏れる者であることが今、分かった。あなたは自分の息子、自分の独り子を私のために惜しまなかった」と言った。神がアブラハムを試みたのは、愛する独り子さえ、惜しまず、神に献げる信仰があるかどうかを試すためであった。あまりに過酷な試

みではないか。アブラハムが目を上げて見ると、ちょうど一匹の雄羊がやぶに角を取られていた。彼は、行ってその雄羊を捕らえ、息子イサクの代わりに焼き尽くすいけにえとして献げた。アブラハムはその場所を「ヤハウエ・イルエ」と名付けた。それは「主の山に、備えあり」という意味である。主の使いは、再び天から呼びかけて言った。「自らにかけて誓われる主のお告げである。あなたがこうして、自分の息子、自分の独り子を惜しまなかったので、私はあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を空の星のように、海辺の砂のように大いに増やす。あなたの子孫は敵の門を勝ち取るであろう。地上のすべての国民はあなたの子孫によって祝福を受けるようになる。あなたが私の声に聞き従ったからである。」今までも幾度か、祝福を約束されたが、今回は、最上級の言葉をもって、祝福の確かであることを宣言された。アブラハムは待たせていた従者の所に戻り、皆、ベエル・シェバに向かった。そして、そこで住み続けた。アブラハムが神の命令に従順に従っている信仰を記している。「主にとっては不可能なことがあるか」という神の言葉の実現をアブラハムは体験した。神に従う全き信仰を得たクライマックスの姿と見るべきであろうか。アブラハムは淡々と従っているようだが、普通に考えれば、耐え難い苦悩に悶えるであろう。ヘブライ書は、アブラハムは死者の中から復活させることができる神を信じたので、イサクを返してもらった(ヘブライ 11:19)と注解している。

しかし、疑問は残る。まず、神はこんな過酷な「試み」を負わせられるのか。そんな神は神とは言えないという解釈もある。主イエスが教えてくださった「主の祈り」の中に「試みに遭わせず、悪からお救いください」という祈りがある。ということは、神は私たちには理解できない試みに遭わせるということである。その試みに耐えたアブラハムの信仰を伝えていと読むべきであろうか。次に、アブラハムがイサクをいけにえにして献げるように命じられた時、妻サラには言わなかったのであろうか。もし、言えば、彼女は気が狂ったように反対するであろう。サラには言わなかった。男性中心の聖書観が背後にあるように思える。また、イサクの動揺も記していない。小羊の代わりに自分が屠られ、火で焼かれる。幼い



レンブラント

イサクは恐怖で身が震えたのではないか。あるいは、父の礼拝をいつも見ていたので、羊の代わりに自分を献げるのだと知って、これに従い、身を委ねたのであろうか。いずれにしても、アブラハムが独り子イサクを献げる出来事には圧倒される。私たちは、このような過酷な「試みに逢わせないように」とひたすら祈るのみである。

アブラハムが独り子イサクを献げる出来事を読んで、ヨハネ福音書3章16節の「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」という言葉が想起させられる。一番大事なものを捧げることが愛である。神はその愛を与えられ、私たちが生きられるようにしてくださった。心からの感謝である。